

相模女子大学

全学共通科目

数理・データサイエンス・AI教育プログラム

自己点検・評価報告書

2025 年度

2023 年度より実施している「全学共通科目 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」は、数理・データサイエンス・AI に関する基礎的な知識・技能を、文理を問わず全ての学生にとって不可欠な基盤的能力として位置付け、全学的な教育体制の構築を目指してきたものである。

2025 年度に実施された全学共通科目のカリキュラム改定においては、本プログラムをさらに発展させ、全学必修科目「コンピュータリテラシー」（半期 2 単位）を基盤科目として設置するとともに、選択必修科目「データサイエンス」（半期 2 単位）および「AI と社会」（半期 2 単位）を体系的に配置した。これにより、プログラムの修了要件を明確化・高度化し、段階的に学修を深める履修体系を整備した。

本報告書では、2025 年度における本プログラムの実施状況を自己点検・評価するとともに、その成果と課題を整理し、今後の継続的な教育改善に資することを目的とする。2025 年度の相模女子大学「全学共通科目 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」の自己点検・評価は、以下のとおりである。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>2025 年度より、本プログラムはカリキュラム改定に伴い、全学必修科目「コンピュータリテラシー」を基盤科目として位置づけ、その上位科目として選択必修の「データサイエンス」および「AI と社会」を体系的に配置する構成へと再編された。</p> <p>2025 年度の履修状況は、全学必修である「コンピュータリテラシー」において計 677 名が履修し、全学生がデジタル機器の基本操作および情報活用の基礎を修得する体制が整備された。そのうえで、発展科目である「データサイエンス」は計 78 名、「AI と社会」は計 150 名が履修した。特に秋学期開講科目において 1 年生の履修者が比較的多く見られ、「コンピュータリテラシー」での学修を基盤として、より専門的内容へ円滑に接続している状況が確認された。</p> <p>これは、基礎科目から応用科目へと段階的に学びを深化させる履修体系が機能していることを示すものである。</p> <p>今後は、履修者の単位修得状況および学修成果の到達度を継続的に分析し、基礎科目と発展科目の接続の質をさらに高めることで、本プログラムの体系的充実を図っていく。</p>

<p>学修成果</p>	<p>2025年度は、基盤科目「コンピュータリテラシー」、発展科目「データサイエンス」および「AIと社会」により、技能・分析・社会的理解の三層構造による学修体系を構築した。</p> <p>「コンピュータリテラシー」では、Word・Excel・PowerPointを用いた文書作成、データ処理、プレゼンテーション資料作成等の実践的演習を通して、ICT活用の基礎技能を修得させた。最終回には三種のソフトウェアを統合的に活用する課題を課し、単なる操作理解にとどまらない応用的活用能力の到達を確認した。</p> <p>「データサイエンス」では、記述統計から推測統計、回帰分析まで体系的に扱い、Excelを用いた演習を通じて、データの整理・可視化・分析および結果の解釈能力の育成を図った。評価は課題および定期試験により行い、統計的思考力の到達度を多面的に確認した。</p> <p>「AIと社会」では、AIの技術的基礎に加え、生成AIの仕組み、公平性・透明性、ガバナンス、リスクマネジメント等を扱い、AIを社会的文脈の中で批判的に捉える力の涵養を目的とした。評価は試験により実施し、理解度の総合的確認を行った。</p> <p>各科目においては、授業支援ツール(LMS)を活用した課題提示およびフィードバックを行うことで、授業外学修を含めた継続的な学修支援体制を整備した。</p> <p>これにより、学生は①ICT活用の基礎技能、②データに基づく分析力、③AIを社会的・倫理的観点から考察する力を段階的に修得する体制が確立された。</p>
<p>学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度</p>	<p>2025年度は、基盤科目「コンピュータリテラシー」および発展科目「データサイエンス」「AIと社会」において学修振り返りアンケートを実施した。回答率は、全学必修科目「コンピュータリテラシー」で約64%、選択必修科目では35~65%であった。回収率のさらなる向上は今後の課題である。</p> <p>回答者の回答傾向を見ると、「主体的・積極的に取り組むことができた」「授業内容を理解できた」とする肯定的回答(「十分にできた」「ややできた」)は、いずれの科目においても概ね90%前後に達しており、授業への参加姿勢および理解度は全体として高い水準にあることが確認された。</p> <p>一方、「到達目標にどの程度到達できたか」という設問では、春学期の発展科目において肯定的回答が80%台前半となる例も見られた。これは、履修者の基礎的な技能の習熟状況や学修経験の差が自己評価に反映された可能性がある。一方、秋学期には同様の傾向は見られず、</p>

	<p>到達度の自己評価は安定していることが確認された。</p> <p>また、「物事を深く捉えることができるようになったか」という設問では、多くの科目で90%前後の肯定的回答が得られた。これは、単なる知識・技能の習得にとどまらず、データやAIを多面的に考察する姿勢の形成に一定の教育効果があったことを示している。</p> <p>以上より、本プログラムは基礎技能の定着、分析的思考力の育成、さらにAIを社会的・倫理的文脈で捉える力の涵養において一定の成果を上げていると評価できる。一方で、より網羅的な実態把握のため、アンケート回収率向上に向けた取組を継続して行う必要がある。</p>
<p>学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度</p>	<p>2025年度の学修振り返りアンケートにおいては、後輩学生等への推奨度を直接問う設問は設けていない。そのため、推奨度を直接的に測定するデータは存在しない。</p> <p>しかし、「この授業を通して、物事を深く捉えることができるようになったか」という設問に対する肯定的回答は、多くの科目において概ね90%前後であり、授業内容に対する満足度および学修成果への肯定的評価は高水準であった。この結果から、回答者における授業満足度は概ね高く、一定の推奨可能性が示唆される。</p> <p>一方で、発展科目については統計やAIに関する内容を含むため、履修登録時に難易度を懸念する学生が存在することも確認されている。本学には数学に対して苦手意識を持つ学生も一定数存在することから、授業内容の見通しをより明確に提示し、初学者にも安心して履修できる環境を整備することが今後の課題である。</p> <p>今後は、推奨度を直接測定する設問の導入も含め、学修満足度をより多面的に把握する仕組みの検討を行う。</p>
<p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>2025年度は、新カリキュラムの実施に伴い、基盤科目「コンピュータリテラシー」を全学必修科目として位置づけ、全学生が本プログラムの基礎的内容を履修する体制が確立された。これにより、本プログラムの履修率は制度上100%となり、数理・データサイエンス・AI教育の基盤を全学的に整備するという目標は達成段階に入った。</p> <p>発展科目である「データサイエンス」および「AIと社会」についても、春学期・秋学期を通じて安定した履修者数を確保しており、基礎科目から発展科目へと段階的に学修を深化させる履修体系が実質的に機能していることが確認された。</p> <p>さらに2025年度は、全学的な履修意識の向上を目的として、全1年生対象の春学期必修科目であるオムニバス形式の「さがみ総合講座」において、「データサイエンス」をテーマとする回を実施し、「データ</p>

	サイエンス」および「AI と社会」の担当教員がその回を担当した。本プログラムの内容や学修意義を広く紹介する機会を設けることで、学生が自らの学修計画の中で発展科目を選択する動機づけを図った。今後は、必修科目を起点とした履修導線の明確化および発展科目への円滑な接続をさらに強化し、履修率の維持・向上とともに学修の質の向上を継続的に図っていく。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>教育プログラム修了者の進路および活躍状況については、本プログラムが 2023 年度後期に開始された比較的新しい取組であることから、現時点での把握は限定的である。</p> <p>2025 年度は基盤科目を全学必修化したことにより、本プログラムの履修対象が全学生へと拡大した。今後は、プログラム修了者の卒業後の進路状況を体系的に把握するとともに、就業後一定期間が経過した段階での活躍状況についても継続的な追跡調査を実施する体制の整備を検討している。</p> <p>企業等からの評価についても、外部関係者からの意見聴取や産業界との連携の機会を通じて、本プログラムの内容・水準に対する評価を把握し、教育改善に反映させていく予定である。</p>
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>本プログラムは 2023 年度後期に開始された比較的新しい取組であり、産業界からの体系的な意見聴取や外部評価の仕組みは、現時点では構築途上にある。</p> <p>2025 年度は、基盤科目の全学必修化により教育体制の整備が進んだ段階であり、今後は産業界および産業界出身者を外部評価委員として委嘱することを含め、定期的に本プログラムの内容・水準に対する評価や提言を受けられる体制の構築を検討している。</p> <p>データサイエンスおよび AI に関する社会的要請は急速に変化していることから、産業界の視点を教育内容に適切に反映させる仕組みを段階的に整備していくことが今後の課題である。</p>

<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>本プログラムでは、数理・データサイエンス・AIを単なる技能や計算手法として学ぶのではなく、その社会的背景や実社会における意義を理解させることを重視している。</p> <p>授業では、日常生活に密接に関わる身近な事例や、現代社会の変化を題材としてデータサイエンスやAIに関する話題を取り上げることで、学生が学修内容と自身の生活や将来との関連を実感できるよう工夫している。基盤科目では実践的なICT活用能力の習得を通じて「使える」という感覚を育み、発展科目ではデータ分析やAIの仕組みを学ぶことで、現象の背後にある構造を理解する経験を提供している。また、講義に加えてデータを扱う演習や事例検討を取り入れ、技術的知識の習得にとどまらず、得られた情報を批判的に読み解き、AI技術の社会的影響や倫理的課題について多面的に考察する姿勢を養うことを重視している。</p> <p>これらの取組により、学生がデータを通じて物事の見方を深め、複雑な情報環境の中で主体的に判断できる力を育成する学習環境を整備している。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>本プログラムでは、教育内容の水準を維持・向上させると同時に、初学者にとって理解しやすい授業設計を行うことを重視している。</p> <p>各科目の第1回では、到達目標、主要キーワード、授業全体の構成を明示し、各回の内容が段階的に積み重なっていくことを説明している。また、毎回の授業冒頭でその回の学習目標を提示し、学修の見通しを立てやすくすることで、学生が主体的に取り組める環境を整備している。</p> <p>本学では文系学生を主な対象としていることを踏まえ、高校までの数学内容の復習を適宜行いながら、身近な事例や具体的なデータを活用し、図表や可視化資料を用いて視覚的に理解しやすい説明を心がけている。基盤科目では実践的なICT操作を通じて「できる」という実感を育み、発展科目では演習や事例分析を取り入れることで、理論と実践を往還しながら理解を深める構成としている。</p> <p>さらに、演習課題やリアクションペーパー、課題へのフィードバックを通じて学生の理解度を継続的に把握し、その結果を次回以降の授業改善に反映させている。</p> <p>今後も、内容の専門性を確保しつつ、学生の理解度や学修状況に応じた授業改善を継続的に行い、分かりやすさと学術的水準の両立を図っていく。</p>

履修者数推移

学部・学科名称	学 生 数	令和 5年度		令和 6年度		令和 7年度		令和 8年度		令和 9年度		履 修 者 数 合 計	履 修 率
		履 修 者 数	修 了 者 数	履 修 者 数	修 了 者 数	履 修 者 数	修 了 者 数	履 修 者 数	修 了 者 数	履 修 者 数	修 了 者 数		
学芸学部・日本語 日本文学科	290	0	0	4	4	0	0					4	1.4%
学芸学部・英語文 化コミュニケーション学科	212	2	2	4	2	0	0					6	2.8%
学芸学部・子ども 教育学科	311	5	4	4	2	0	0					9	2.9%
学芸学部・メデイ ア情報学科	403	4	4	14	13	4	4					22	5.5%
学芸学部・生活デ ザイン学科	224	0	0	11	10	0	0					11	4.9%
人間社会学部・社 会マネジメント学 科	306	3	1	9	8	4	4					16	5.2%
人間社会学部・人 間心理学科	430	7	7	3	2	0	0					10	2.3%
栄養科学部・健康 栄養学科	273	1	1	1	0	0	0					2	0.7%
栄養科学部・管理 栄養学科	372	9	8	11	11	1	0					21	5.6%
合 計	2821	31	27	61	52	9	8	0	0	0	0	101	3.6%

※令和7年度より全学共通科目のカリキュラム変更により1科目→3科目に変更

※令和7年度は受講対象1年生、令和8年度は1.2年生、令和9年度は1-3年生、令和10年度に完成年度となる